

2021年3月28日 礼拝説教要旨

詩編講解説教54 「御名によって」

詩編54：3～9、ヨハネ17：25～26

今日は神の名について考えます。先週も触れましたが「ヤハウエ」はユダヤ人が神さまを呼ぶ特別な呼び名、固有名詞です。けれどもユダヤ人たちは十戒の第三戒「主の名をみだりに唱えてはならない」を厳格に守るゆえに、このヤハウエという呼び名を口にすることを恐れました。それゆえアドナイという言葉で言い換えた。その結果、本当の呼び名を忘れてしまったという嘘のような本当の話があります。現在、わたしたちがヤハウエと神さまの名を読むことができたようになったのは19世紀になってからです。ちなみにそれまでは「エホバ」という読み方もありました。これは現在では誤読とされていますから使われておりません。興味深いことに第54編は神さまの名であるエロヒーム、ヤハウエ、アドナイが混在するという非常に興味深い詩編です。

ご存知のようにユダヤ人はこの神さまの名を大変重んじ、またこの扱いについては非常に神経を使いました。それは「名は体を表す」というように、神さまの名は神さまの本質そのものをあらわすからであります。ですからこれを軽んじるということは絶対にあってはならないことでした。それゆえに十戒でも「主の名をみだりに唱えてはならない」と教えられます。それは旧約聖書だけでなく、新約聖書にも受け継がれ、主の祈りでも「御名を崇めさせ給え」と祈ります。御名をあがめる。聖とするということです。信仰において神さまの名は重要な意味を持っています。

しかし神さまはそういう大切なご自身の名前をわたしたちに教えられます。それは何よりもわたしたちを信頼しているからではないでしょうか。わたしたちの人間関係でも、自己紹介でお互いが名乗るということはそこで名前呼び合う人格的な関係を作ることを意味します。名前と呼ぶというのは、相手を他と比べることができない唯一の存在とすることです。神さまが名前を知らせるといのは、わたしたちが神さまを唯一の存在とすることです。神さまはご自身の名を知らせることでそういう神さまとの特別な関係の中にわたしたちを迎えてくださいます。

では特別な関係とはどういうものでしょう。神さまの名ということについて考える上で重要な聖書の御言葉の一つに出エジプト記第3章にありますモーセの召命の話があります。「神はモーセに、『わたしはある、わたしはあるという者だ』と言われ、また、『イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと』」（出エジプト記3：14）ここは神さまがご自身の名をモーセに知らせるところです。「わたしはある」の「ある」と訳されているのは存在を意味するハーヤーという言葉です。神の名ヤハウエという発音はこのハーヤーを元にしています。一昨年、急逝された東京神学大学の学長大住雄一先生は、この「わたしはある」というところを「わたしだ、そうだ、わたしだ」と訳しています。「わたしだ。わたしがここにいる」これが神さまの名前なのです。新しい翻訳である聖書協会共同訳では「わたしはいる」と訳しました。最初は違和感がありましたが、この「わたしはいる」というのも悪くないと思います。この時モーセは神さまからの召しを受けて不安でした。そのモーセに「わたしは共にいる」者だ。だから大丈夫、安心しなさいと神さまは言われるのです。神さまの名前がそういう意味を持っている。これほど心強いことがあるのでしょうか。

そしてこの名はまさにイエス・キリストにおいて引き継がれていきました。主イエスは「インマヌエル（神は我々と共におられる）」（マタイ1：23）という名をお持ちになられます。さらにはこのイエス・キリストの救いのゆえに「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28：20）という約束をしてくださるのです。神さまの名に、すでに神さまが共におられるという事実がある。この共にいるという関係性。これが信仰において決定的に重要なことなのです。

それゆえこの詩人も神さまの御名に依り頼みます。この詩の表題を見ると、「ジフ人が来て、サウルに『ダビデがわたしたちのもとに隠れている』と話したとき」（2節）とあります。この詩の背景にもダビデとサウルの確執がありますが、サウルにダビデの居場所を密告するものがあるのです。ダビデにしてみれば絶体絶命の状態。でも詩人は言います。「神よ、御名によってわたしを救い、力強い御業によって、わたしを裁いてください」（3節）「見よ、神はわたしを助けてくださる。主はわたしの魂を支えてくださる」（6節）一人でこの難局に立ち向かうのではない。神さまが共におられる。その心強さが詩人を奮い立たせています。

神さまが共におられるというのは、気休めとか、何か感傷的になることではなく、神さまが実際に共におられ、神さまがその難局に立ち向かわれるということです。詩編46編「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」（46：2）これは単なる気休めではありません。あの出エジプトの時も「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」（14：14）と言われ、神さま自らその困難に立ち向かってくださいました。そして約束の地への道を切り開かれたのです。今週は受難週ですが、それが主の十字架でなくて何でしょう。わたしたちの罪の苦しみ、死の苦しみのすべてを主は担われ、わたしたちに代わって戦ってくださいます。そしてよみがえりの命を持って、これに勝利されるのです。そして救いの道を開かれました。

洗礼を受けて、キリストに結ばれることで、神さまが共にいるという関係性はわたしたちに確かなものとされます。本来、罪ゆえに神さまと断絶した状態にあったわたしたちが、苦難の中でも神さまの御名を呼び、信頼し、すべてを委ねることができるようにしてくださった。わたしたちが何気なく「主の御名によって祈ります」と祈る、その御名によることがいかに幸いなことであるか。わたしたちは神さまが共におられなければ祈ることも、自分で立っていることもできません。だからこそ神さまはご自身の尊い御名をわたしたちに知らせてくださいました。その恵みに感謝しましょう。